

第2回「上海に行こう」研修旅行報告

The report which “will go to Shanghai” the 2nd time

柴田 幹夫*

(shibata@isc.niigata-u.ac.jp)

In Feb, 2009, the report of mainly visiting Shanghai University of Finance and Economics.

はじめに

今回訪問した上海大学の学生侯佳玲さんのブログに私の写真と簡単な私の紹介があった。曰く「从来没见过能和学生关系这么好的老师」と。これは私にとっては最大のほめ言葉であろう。外交辞令として割り引いても悪い気はしない。つまり今回の上海研修旅行は実に愉快で楽しかったと言うことだ。

学生を引率しての上海訪問は2回目であるが、前回にも増して楽しい引率であった。とくに今回は「交流」という事を前面に押し出した。語学研修を軽視しているわけではないが、わずか5日間の語学研修(それも午前中1時間か2時間)だけではあまり意味を持たない。そこで、大学訪問や企業訪問を通じて現下の中国の大学生或いは企業に興味関心を持ってくれた方が、生の「中国」、特に「上海」を理解する上では有用だと思えたからである。

私は上海大学訪問と上海グリコ訪問を担当したのだが、上海大学は学生数5万を擁する大きな学校であった。広大なキャンパスに点在していた校舎はまだ新しく、これからの大学だという感じがした。旧知の研究者が大学の党委副書記(副学長クラス)になっていたのも、彼の案内のもと学内をまわり、昼食をご馳走になった。その後、新潟大学の卒業生(上海大学の教員ウリジト先生)がこちらの学生との交流を用意して下さり、上海大学の学生たちと交流を深めた。予想以上に盛り上がり、帰りが遅くなったので、夕食を学生たちと一緒に採ることになった。洋の東西を問わず学生たちの関心事はファッションであり、芸能人の事であるなど、勉学以外の話題で盛り上がっていたようである。彼らは一様に日本のことをよく知っていた。果たして我々日本人は中国のことをあまりにも知らなさすぎたようである。これを機会に関心を持ってくれたらこの訪問は成功であろう。

交流を深める上で最も大切なのは、人間としての力、つまり「人間力」とも言えるものを持っているかどうかである。この人と話をして楽しい、愉快的気持ちになれる、というようなものである。もちろんこれらは一朝一夕に身につくものではなく、人生経験や多くの修羅場をくぐってこそ身につくものである。また深い教養によって裏打ちされるものでもある

* 新潟大学国際センター

第2回「上海に行こう」研修旅行報告

う。ただ学生には学生の段階としての「人間力」というものもおそらく存在しよう。ここでは（学生との交流の場）「人間力」発揚のために、言葉が介在した。ある日本人学生は上海大学のある学生を一目惚れしてしまった。私は彼の一途な姿を見て良く輔けようとしたのだが、その後の展開は知らないが、おそらく必死に言葉を勉強しているに違いない。ただ言葉だけではない彼の「人間力」に期待したい。

この一週間のささやかな体験をもとにして中国を上海を、そして自分の人生を考えていただければ教員としてこれほど嬉しいことはない。ここでは「上海に行こう」の準備から帰国までを簡単に鳥瞰することによって報告に代えたい。

1. 「上海に行こう」について

「上海に行こう」は筆者が数年前からGコード科目として開講しているもので、主として中国事情を発表形式で行っている。ただ今回あるいは前回は行った「上海に行こう」現地研修は授業履修者だけではなくて、一般の学生も参加できる形態をとった。今回を例にとると、説明会を3回行い、参加希望者に対しての学習会を2回行った。これはただの物見遊山だけにはしたくなかったからである。

私たちはこの「上海に行こう」交流プログラムを、相互交換ショートステイプログラムと位置づけた。正規留学の前段階としての体験型短期海外滞在として位置づけたのである。国際センターが、日本人学生を協定校に送りだし、協定校より留学生を受け入れる、そのやりとりを通して学生たちに異文化理解、コミュニケーション力の大切さを身につけさせるプログラムである。相互交換ショートステイプログラムは、国際感覚の育成を目的とする。そのため、学習内容も、「語学学習」のきっかけづくりと「国際関係を中心とした科目」に重点を置いた。我々を受け入れていただいた上海財経大学は、語学学習と国際関係科目を提供するのにふさわしい大学であり、また新潟大学の卒業生が財経大学の教員となっているので、コミュニケーションをとりやすい。さらに財経大学でありながら、文科系のみならず、数学系などもあるなど文理融合型の大学であり、また規模がそれほど大きくはなくて、しっかり交流ができると考えたからである（ただ残念なことに未だセンターとして交流協定を結んでいないが）。2007年3月に我々が初めて訪問にし、それに応える形で翌2008年7月に財経大学の学生が新潟大学を訪問してくれた。継続は力なりという言葉はあるように、今年は私たちが2月21日から28日までの1週間訪問した。

2. 交流について

「上海に行こう」の大きな柱は上海での学生たちとの交流であった。今回も財経大学のみならず、華東師範大学、華東理工大学そして上海大学を訪問した。いずれの大学も本学の卒業生が教員となって活躍しているところである。学生を3班に分けて、それぞれ訪問したが、いずれも大歓迎を受けたことは言うまでもない。今でも多くの学生たちは中国の学生とメー

ルで連絡を取り合ったり、中国留学を考えている学生もいる。

さらに今回も上海にある日系企業を訪問して、実際に上海に展開している企業の実態を勉強してきたことは大きな収穫であった。私は前述したように上海グリコを訪問引率したのだが、学生のうち数人は本気かどうかかわからないが、上海グリコ就職希望も学生も出てきた。

3. 問題点と今後の交流について

順風満帆と事が進めばいいことはないのだが、今回も旅行社の方が介在していたので、研修のなかに観光コースが組み込まれていた。危機管理ということを考えると旅行社を介在させた方がいいのかもしれないが、意味のない土産物屋を数カ所回ったりして時間の無駄のような気がした（もちろんこれは私個人の意見で参加した学生の中には満足して学生もいたかもしれないが）。さらに今回は2人の学生がデジカメを拘られるという事態が起こった。事前学習では想定外のことであった。ただこの事件により、宿泊していたホテルから追い出されるという奇妙な経験をする事となった。現地旅行社と日本の旅行社の迅速且つ周到な行動で我々は以前にもまして立派なホテルに移ることができた。中国の本音と建前を見たような感じがしたが、現実の中国の在り方を垣間見たようであった。今後の教訓としたい。

現地での中味の問題は、参加した学生たちが、自主的にプログラムを構成しているのではなくて、私たちが作ったプログラムにただ乗っているだけなので、主体的に関わることが難しいような感じがした。これは事前の準備をかなり前からやっていないとできないことであるが、今後の検討課題としたい。

今後の交流であるが、上海だけにとどまらず、中国各地を見ていきたいと考えている。上海も確かに中国の一部であるが、上海を見て中国が理解できたとは決して言えない。上海は大きすぎる都市であり、開発開発で中国らしさがだんだん失われている都市でもある。従って我々は中国らしさを残している都市を訪問することも選択肢の一つとして残しておきたいと考える。ただ中国を訪問することだけは間違いなく続けるであろう。

4. 参加した学生たちの評価

今回参加してくれたのは法・工・歯学部を除く6学部と法科大学院からの学生17名であった。いずれも個性豊かな学生たちであった。研修終了後、彼らに対して感想文を提出するように依頼した。いずれ全文は『報告書』という形で明らかになるだろうが、概ね学生たちの評価は「良好」というものであった。

最後に参加してくれた学生たちの意見を簡単に紹介しよう（全文は後日発行される『報告書』に記載される）。なお紙面の関係で各学部一人ずつの紹介になってしまうが諒解願いたい。

人文学部4年生Uさん：上海に対する最も強い印象は、世界的な金融危機の中にあってもなお成長を続けるパワーを内包しているということでした。外から見る中国・上海は、発展しつつあるとはいえ日本にはまだまだ及ばず、いつまでも発展途上にある都市のような気がしていました。また2年前の北京留学から、中国は大都市でもかなり遅れているというイメージのままでした。しかし実際上海の中に入ってみて、それが間違いだということに気付かされました。外灘から見える商業ビル群、新天地の華やかさ、数え切れないアパートの連なりからしても、この土地に多くの人が住み、絶えず上へ向かって経済活動を行っていることが分かります。東華大の陳先生のお話では、上海はロンドンやニューヨークのような金融センターを目指して発展するつもりとのことでした。もはや上海は東京を見ていない、それよりも上を目指す意志があるといえるでしょう。東陽電装では日本よりも活気があるとお聞きしましたし、刀の形をした森ビルの「上海環球金融中心」を超える高さの、龍の形のビルを中国資本の企業が建造する計画もあるそうです。もちろん成長の程度や格差の問題もあるとはいえ、都市全体がハングリー精神を持ち、常に上を目指して発展を続けていこうとしていると感じました。それと同時に、先進国だとして安心しきっている日本に危機感を覚えめました。外からではなかなか見えないリアルな上海を肌に感じ、国や文化、言語、社会問題などについて自分なりに考えることができたのが私の収穫です。

そして、全く見知らぬ人たちと1週間一緒という環境も、大変過ごしがいのあるものでした。4年生もほとんど終わりになって、こんなにも頼られ、後輩や先輩と話して、新しい友達ができるとは思ってもいませんでした。急に挨拶をさせられたことや、タクシーの中でテンパったこと、毎晩のように飲み会があったこと、行く先々で中国語を使う機会に恵まれたこと、そのために今後も中国語を勉強し続けていこうと思えたこと、どれも皆さんと過ごしたからこそその貴重な経験です。

教育人間科学部4年生Eさん：上海に対する深い理解を自分に促すとするならば、現地の環境に身をおき土地の人間とコミュニケーションを図りながら自分の考えと土地の人間の考えを重ねていく必要があると思います。今回の旅行では満足な中国語を話せず、また中々聞き取れなかったためコミュニケーションを図る機会が少なかったと考えています。次に上海に行く際には中国語を自由に扱えると、今まで見えてこなかった気づきが多く生まれると思います。今回の研修で再び上海に行きたいと思い、また中国と関わる仕事がしたいとも思いました。

理学部1年生Mさん：帰ってきて今でも思い出し一番恋しく思うのは、何ととっても沢山の人々との触れ合いである。訪問した上海財經大学、華東理工大学での学生達との交流は、忘れられない出来事のひとつであった。一緒に食べた美味しい中華料理や、お互いに交わした質問。生まれた国や言葉は違えどもドラマ番組やスポーツといった同じ話題で一緒に笑いあえたことは非常に嬉しかった。交流した学生達は日本語学科ということもあってか日本の作品について非常に詳しく、どうしても日本の話題が中心になってしまったことを少し申し訳なく思ったが、他の国の人が自分の国のものを好きだと言ってくれるのは嬉しかった。逆に紹介してもらった中国の作家や音楽について日本でも調べたり実際に聞いたりし

て、自分の幅を広げることができたと思う。日本語を学んでいる彼らのとても熱心な姿も印象深かった。最終日の討論会で話し合った大学で学ぶことについての議題では、彼らの学問へのモチベーションの高さに驚いた。大学に入ってから1年はあっという間だったように思う。それを考えると、卒業までの時間も長いようでも瞬く間に過ぎていってしまうのではないと思う。上海、新潟両大学の先輩の自分の専門についての考え方を聞いたことは、私にとってとても有意義なことであった。自分の身を振り返り、自身の志を固めなおす良いきっかけになったと思う。さらに今回の旅行をきっかけに知り合うこととなった新潟大学のメンバーとの出会いも大変貴重なものだった。普段はあまり交わることのない色々な学部から集まったメンバーとの一週間の共同生活はとても刺激的だった。「上海へ行こう」のプログラムは終わってしまったが、是非これからも同じ新潟大学の仲間として、同じ地を踏んだ仲間として、仲良くしていけたらいいと思う。

経済学部2年生Mさん：できるなら上海にずっといて玲玲ともっと一緒にいたかった。一週間がとても短く感じた。今この文章を見返すと、なんだかもすごく恥ずかしいことを書いているような気がする。上海へ行く前の自分ならこんなこと絶対書けないだろう。柴田先生が上海に行って僕の人格が変わったと言っていたが、案外本当なのかもしれない。いい意味で、自分はバカになったような気がする。本当に楽しかった。中国語を話せるようになりたいと本気で思った。いつかまた僕は上海に行こうと思う。それまでにしっかり中国語を勉強したい。

医学部1年生Hさん：この日は財経大学の学生さんといろいろなことについて討論しました。専業主婦についてのことから成都で起きた大地震のことについてまで本当にいろいろでした（思わずトイレ事情を聞いたのは私）。文化が違うだけでこうも考えが違うのかと思う一方で、何気ない話をしているとどの人も一緒だなあと感じました。

その日の私たちがお世話になった人たちへの答礼会はうまくいった感じがします。最後にいっぱい写真を撮って話して、プレゼントを貰っちゃって（とてもビックリしてすごい嬉しかった！！）ご飯を食べて、騒いで楽しかったです。まさか卒業証書を貰えるとは思わなかった（一週間だけなのに！？）。

農学部3年生Sさん：この企画の意図は、これから先私たちが中国語や中国のことをもっと勉強する上でのきっかけ、あるいは中国の人たちと交流を深めるきっかけになることだと言っていたが、まさに、そのとおりの結果になったと思います。ただの観光地巡りならば、旅行社にお金を払えばいくらでも行けます。しかし、このような体験をすることのできる機会はめったに無いと思います。もしまたこのような機会があったら絶対参加したいですし、他の皆さんにも是非とも参加することをお勧めしたいと思います！

実務法科大学院2年生Tさん：上海の学生との交流は、個人旅行ではなかなか体験できないところであり、日本の漫画やアニメ、音楽、映像といった現代文化が上海に与える影響は想像を超えていた。これは一方で、日本の若者が上海人と接点をもつ切り口としては、親しみやすい。だが、他方で、外国文化を取り入れるあまり、中国・上海独自の文化意識というもの稀薄となっているのではないかと疑念を抱いた。これからの交流を通して聞きたい。

第2回「上海に行こう」研修旅行報告

上海の町並をみて、建築物のインパクトは日本以上であった。とてもパワーを感じた。しかし、その反面、都市景観や高層ビルによる日照の問題など、無秩序に乱立している印象を受けた。生活環境に配慮した都市計画なのか。戸籍の政策的な問題もあるようだ。町の片隅を見ても、上海の光と影のコントラストは強そうである。日系企業の中国工場の現場について見学していて印象深かったのは、労働者が非常に若かったことである。この工場でも、日本と同様に、工場と直接契約している人は少なく、国の許可している会社が斡旋している労働者が八割程なのだそうです。そして、平均年齢は25歳前後であり30歳を超える人はほとんどいない。中国の工場でも、若い人の仕事離れが顕著であり、雇用の流動性を抑えるという課題があるようだ。

以上簡単に参加者の感想を引用させていただいた（筆者の興味関心のあるところで引用した）。いずれにせよ正直な感想であることは間違いない。



「上海へ行こう」日程表

2月21日に新潟を出発するが、その日は旅行社手配で蘇州旅行に行く。22日の夕刻上海に戻る。

	内 容	備 考
2月23日	09：00 「上海へ行こう」開講式 上海財経大学 09：30～10：00 校内見学 10：15～11：30 中国語講習（3班） 11：30～13：00 昼食 午後 上海博物館見学と講義 17：30～ 夕食（歓迎会）	財経大学外国語学部長 王曉群先生 財経大学外国語学部 尤東旭先生 日本語学科の学生とともに 財経大学教員 大学食堂 博物館教育部 郭青生先生 「水中花」（国権北路 邯鄲路）
24日	09：00～10：00 中国語講習 10：15～ 嘉定 11：30～13：00 昼食（南翔小籠包） 13：00～16：00 嘉定科学博物館見学 夕食 各自	財経大学教員 班ごとに自由に取り
25日	09：00～10：00 中国語講習 10：15～11：30 中国語講習 11：30～13：00 昼食 13：00～16：00 大学訪問 A：華東師範大学 B：上海大学 C：華東理工大学 夕食 各自	財経大学教員 大学食堂 訪問大学は変更する可能性がある 班ごとに自由に取り
26日	09：00～10：00 中国語講習 10：15～11：30 上海事情(1) 11：30～13：00 昼食 13：00～15：00 日系企業見学 夕食 各自	財経大学教員 東華大学 陳祖恩先生 大学食堂 上海グリコ・日立化成・東陽電装有限公司 班ごとに自由に取り
27日	09：00～10：00 中国語講習 10：15～11：30 上海事情(2) 11：30～12：30 昼食 12：45～14：15 財経大学学生と座談会 14：15～17：30 自由行動 18：00～20：00 夕食（答礼会）	財経大学教員 財経大学 範建亭先生 大学食堂 歴史認識などについて 「順風大酒店」（重慶北路, 上海大戲院対面）
28日	朝食後空港へ 09：25 MU-295 新潟空港 解散	